

博士学位論文概要書

題名： *Vādanyāya* におけるダルマキールティの討論思想の研究

佐々木 亮

序

「*Vādanīyāya* におけるダルマキールティの討論思想の研究」と題する本博士学位論文は、インド仏教認識論・論理学の大成者であるダルマキールティ (Dharmakīrti, 600-660 年頃) の作品である *Vādanīyāya* (『討論の理』, 以下 VN) の解説を中心として、インド討論思想史の展開の一端を解明することを目的とするものである。

古来、インド思想は、討論 (vāda) との緊密な関係性を保ち続けてきた。そのような土壌のインドで討論術・討論規則が整備されたことは至って自然なことであり、その諸規則の中でも重要な項目の一つである「敗北の条件」(nigrahasthāna), 即ち、討論者たちがその討論において敗北に至るための条件は、時代の趨勢として思想家たちの関心を大いに集めた。*Carakasamhitā* や『方便心論』での考察を経て、ニヤーヤ学派の根本聖典 *Nyāyasūtra* (以下 NS) が「敗北の条件」を含む討論思想をインド思想史上で初めて体系的に整備したことも、この潮流の中に位置づけられる。そして、インド思想史上でもとりわけニヤーヤ学派は、NS 以降も、注釈書 *Nyāyabhāṣya* (4 世紀頃, 以下 NBh) や、復注釈書 *Nyāyavārttika* (6 世紀頃, 以下 NV) によって討論術の体系を洗練させた。このニヤーヤ学派の討論術に対して、特に「敗北の条件」に焦点を当てて仏教徒の立場から批判を展開したのが、本論文の主要検討対象となる、ダルマキールティの著作 VN に他ならない。

本研究では、VN に対するシャーンタラクシタ (Śāntarakṣita, 725-788 年頃) の注釈書である *Vipañcītārthā* (以下 VA) を活用しながら、VN におけるダルマキールティの「敗北の条件」体系を分析するために必要な箇所を抄訳し、その内容を分析する。そして、VN 前半部 (M. T. Much の校訂テキスト pp.1-24 に相当) の敗北の条件の定義と、VN 後半部 (同テキスト pp.25-68 に相当) において正しいと認められるニヤーヤ学派の敗北の条件の定義とを対照させることにより、VN の包括的な論理構造を解明する。更にその上で、後代のニヤーヤ学派に対する VN の影響力の射程を探る。これらの研究は、先行研究が極めて乏しいにも関わらず、インド思想史上における VN の位置付けを明らかにするという意義のみならず、インド討論思想史・論理学思想史の一端を解明するという価値をも有している。

第 1 部について

「*Vādanyāya* 注解研究」と題する第 1 部では、文献学的手法に基づく VN の解読研究を行い、その抄訳と解説を提示する。なお、先述の通り VN はその内容構成上、ダルマキールティ自身による「敗北の条件」の一般的定義を提示する前半部と、ニヤーヤ学派の提示する「敗北の条件」の定義を批判的に検討する後半部とに分けることができる。従って、第 1 部を第 1 章と第 2 章の二つの章に開き、それぞれ順に、VN 前半部を抄訳・解説する章、また、VN 後半部を抄訳・解説する章とする。以下、各章での検討内容を要略的に示すこととする。

第 1 章の概要

第 1 部第 1 章では、VN 前半部を抄訳し、その内容を分析的に検討した。ここでは、ダルマキールティは「敗北の条件」を、立論者にとっての敗北の条件である *asāadhanāṅgavacana* と、対論者にとっての敗北の条件である *adoṣodbhāvana* とに区別している。更に、前者に対しては五通りの語義解釈が、後者に対しては二通りの語義解釈が示されているため、敗北の条件には総計七項目の細目が掲げられることになる。その七項目の解釈と具体例を簡略に纏めるならば、以下のようになる。

- 1-1. *asāadhanāṅgavacana* の第一解釈は、*sāadhanāṅgasya avacanam* と分解し、「証明の要因を述べないこと」と訳される。具体的には、論証因を全く述べないことや、正当化された論証因（本質因・結果因・非認識因）を述べないことに相当する。
- 1-2. *asāadhanāṅgavacana* の第二解釈は、*sāadhanāṅgasya avacanam* と分解し、「証明手段の構成要素を述べないこと」と訳される。具体的には、論証因の三条件に関して、第一・二条件のどちらか一方を、もしくは、第一・三条件のどちらか一方を述べないことに相当する。
- 1-3. *asāadhanāṅgavacana* の第三解釈は、*asāadhanāṅgasya vacanam* と分解し、「証明手段の構成要素でないものを述べること」と訳される。具体的には、主

張命題・適用・結論や、二番目の肯定的随伴関係・否定的随伴関係を述べることに相当する。

- 1-4. asādhanāṅgavacana の第四解釈は, asādhanāṅgasya vacanam と分解し, 「証明の要因でないものを述べること」と訳される。具体的には, 疑似論証因・疑似喩例を述べることに相当する。
- 1-5. asādhanāṅgavacana の第五解釈は, asādhanāṅgasya vacanam と分解し, 「証明を要素としないものを述べること」と訳される。具体的には, 論題でないことを述べることに相当する。
- 2-1. adoṣodbhāvana の第一解釈は, doṣasya anudbhāvanam と分解し, 「過失を指摘しないこと」と訳される。具体的には, 不足や, 不成立因・不確定因・相違因などを指摘しないことに相当する。
- 2-2. adoṣodbhāvana の第二解釈は, adoṣasya udbhāvanam と分解し, 「過失でないものを指摘すること」と訳される。具体的には, 誤った論難としての返答を行うことなどに相当する。

以上のように, 本研究では, ダルマキールティが正しいと見做す二系統七項目の敗北の条件の総体を確認し, 加えて, この敗北の敗北の条件の体系を論じるに当たってダルマキールティが派生的に検討している哲学的・論理的な諸問題の分析を行った。

また, ダルマキールティは, VN における討論思想として, 敗北の条件のみを取り扱ったわけではない。VN では, 「善人の討論」(satām vādaḥ) という新しい討論概念が提起されている。これは従来ニヤーヤ学派が提示してきた諸々の討論概念とは異なる性格をもつものである。本研究では, ダルマキールティは「善人の討論」を, 立論者と対論者が, 曲解などの悪行ではなく正しい証明や本当の過失を示すことを手段として互いの主張の正当性を競い合い (=ニヤーヤ学派の説く jalpa や vitandā とは異なる点), 敗北の条件を認めることで討論の勝敗を決しはするが (=ニヤーヤ学派の説く vāda とは異なる点), 勝利そのものではなく真実を確立することで討論相手を含む討論集会の参加者達に裨益することを目的として行われるものであると規定した, ということを解析した。

さらにまた, VN 前半部からは, VN における討論の勝敗条件が, 立論者と対論者の両者が互いに正しい証明を明示する能力と本当の過失を説示する能力を損壊せしめ合うことに依拠して決まるものであることが判明した。即ち, 立論者がただ単に

asādhanaṅgavacana に相当する振る舞いを為すことのみから、あるいは、対論者がただ単に adosodbhāvana に相当する振る舞いを為すことのみから、それぞれ敗北したと判ぜられるわけではない。従って、本研究では勝敗条件の詳細を分析し、フローチャートの形式で整除して示した。

第 2 章の概要

第 1 部第 2 章における主要な考察対象は、VN 後半部の内容である。そこでは、ニヤーヤ学派の規定する二十二項目からなる伝統的な敗北の条件が、NBh 及び NV の諸説を踏まえつつ、一項目ずつ批判的に検討されている。

二十二項目の敗北の条件に対するダルマキールティの批判的検討の内容を解読し、分析した結果、ダルマキールティがニヤーヤ学派の敗北の条件の大部分を正しい敗北の条件として認めない反面、極一部の項目については真正の敗北の条件として認容していることが判明した。そして、とりわけその二区分のうちの後者に関しては、ダルマキールティが正しい敗北の条件として認めるものである以上、VN 前半部の二系統七項目の敗北の条件と何らかの対応関係があることが予期されるであろう。ところが、その対応関係が具体的にはいかなるものであるのかという点については VN 本文には明示的な形で説かれてないが故に、我々自身が文脈を踏まえて分析的に判断せねばならない。そして、この問題が解明されない限りは、VN の包括的な論理構造は明示されないままである。しかしながら、管見の限りではこの問題を検討している先行研究はほぼ存在しない。従って、本研究では、以上の課題に取り組むための前段階として、VN 後半部においてダルマキールティが検討する様々な論題のうち、特に重要と思われる箇所を選択的に取り上げて抄訳しながら、その内容を分析した。

第2部について

「*Vādanāyāya* の思想史的意義の解明」と題する第2部では、インド討論思想史上においてVNが果たした意義を明らかにする。即ち、第一部で検討した内容をもとに、VNの著述意図を含む包括的な論理構造を明らかにすること、及び、VNが後代のニヤーヤ学派の諸論師へ如何なる影響を与えたのかを解明することを企図する。それぞれ順に、第3章、第4章での検討内容となる。

第3章の概要

第2部第3章では、VNの前半部分と後半部分との対応関係をもとに、VNの包括的な論理構造を示し、VNとはそもそもいかなる意図で書かれた論書であるのか、という問題の解明に取り組む。

第1部第2章において、ニヤーヤ学派の規定する二十二項目の敗北の条件に対するダルマキールティの批判的検討を概観したが、そこでは、ニヤーヤ学派が示す二十二項目が、ダルマキールティによって正しい敗北の条件として認められる項目と、正しい敗北の条件であるとは認められない項目との二種類に大別されるということが確認できた。

ダルマキールティは、VN後半部において、ときに全面的な賛同という仕方で、ときに条件付きの承認という仕方で、あるいは、ときに非明示的な示唆という仕方で、ニヤーヤ学派の規定する二十二種類の敗北の条件の一部を、正しい敗北の条件として認めた。その項目とは、第六番目「他の事柄」(arthāntara)、第十一番目「不足したもの」(nyūna)、第十二番目「余分なもの」(adhika)、第十六番目「思い浮かばないこと」(apratibhā)、第二十二番目「疑似論証因」(hetvābhāsa)の五つである。

しかし、その五つのいずれの場合も、第1部第1章で検討した *asādhanaṅgavacana* ないし *adoṣodbhāvana* のどの解釈にそれぞれ対応しているのか、という点をダルマキールティは自ら解説していない。そこで本稿では、VN前半部においてダルマキールティが定義した二系統七項目の敗北の条件と、VN後半部において批判的に検討されたニヤーヤ学派の規定する二十二項目の敗北の条件との対応関係を分析した。その分析結果は、以下の表1のように纏めることができるであろう。

表 1

| 正しいと見做される ニヤーヤ学派の敗北の条件 | ダルマキールティの敗北の条件 |
|---------------------------|---|
| 《6》他の事柄 (arthāntara) | asāadhanāṅgavacana の第 5 解釈 adoṣodbhāvana の第 2 解釈 |
| 《11》不足したもの (nyūna) | asāadhanāṅgavacana の第 1・2 解釈 |
| 《12》余分なもの (adhika) | asāadhanāṅgavacana の第 3 解釈 |
| 《16》思い浮かばないこと (apratibhā) | adoṣodbhāvana の第 1 解釈 |
| 《22》疑似論証因 (hetvābhāsa) | asāadhanāṅgavacana の第 4 解釈 |

この表 1 では、左の「正しいと見做されるニヤーヤ学派の敗北の条件」として挙げられた五項目に対して、その各々の右側に、内容上一致すると考えられる「ダルマキールティの敗北の条件」が列挙されている。

他方で、この五つ以外のニヤーヤ学派の敗北の条件に対しては、ダルマキールティは、項目内容を批判する仕方での当該のニヤーヤ学派の敗北の条件の説明が不適当なものであることを、あるいはまた、項目分類法を批判する仕方での当該のニヤーヤ学派の敗北の条件が不必要なものであることを批判し、排斥している。

さて、ダルマキールティが、この「敗北の条件」体系の中核となる定義を示した VN 1,4-5 (v. 1) の内容を改めて簡潔に述べれば、「asāadhanāṅgavacana と adoṣodbhāvana のみが正しい敗北の条件である」ということであつた。この文言から分析的に把握される趣意は、ダルマキールティが自身の「敗北の条件」体系に求めたものが「真正性」と「十全性」という二つの要件であつたということに他ならない。

まず、前者の「真正性」、即ち、ダルマキールティの示す敗北の条件の定義が紛れもなく正しいものであるということは、VN 前半部で仏教論理学との関連性において示されている。即ち、ダルマキールティは敗北の条件の定義に対して具体的内実を与える際に仏教論理学の諸概念を用いているが、彼にとっての敗北の条件は、他学派の論理学ではなく、あくまでもダルマキールティ自身の論理学に基づいて正しい定義が与えられねばならないものなのである。例えば、この点に関してダルマキールティとニヤーヤ学派の敗北の条件の対比が明瞭に表れている例として、ダルマキールティの定

義した *asādhanaṅgavacana* の第三解釈（証明手段の構成要素でないものを述べること）と、ニヤーヤ学派による第十一番目の項目である「不足したもの」（*nyūna*, 五つの支分のうちのいずれか一つでも支分が欠けている証明文を述べること）とを挙げることができる。前者によれば、立論者は証明の際に主張命題や適用や結論を述べると敗北すると規定されており、後者では、立論者が主張命題や適用や結論を述べなければ敗北するとして、前者とは真逆の規定がなされることになる。ダルマキールティは検討の末、論理学上の術語である証明手段（*sādhana*）の捉え方に関して自身の立場の正しさを示すことにより、*asādhanaṅgavacana* の第三解釈という自身の敗北の条件の定義の真正性を保証しようと試みている。この例からも明白なように、VN における敗北の条件の定義の真正性は、仏教論理学の正しさに依拠したものとなっているということである。

他方で、後者の「十全性」、即ち、ダルマキールティの「敗北の条件」体系が何か別の学説によって説明されねばならないような不十分な点がないということは、VN 後半部でのニヤーヤ学派の学説との関連性において示されていると考えられる。何故ならば、ダルマキールティにとって最も忌避すべき事態とは、*asādhanaṅgavacana* と *adoṣodbhāvana* のどちらにも収まらないような正しい敗北の条件を、先達であるニヤーヤ学派が説いているということだからである。もしそのような敗北の条件をニヤーヤ学派が説いているとすれば、「*asādhanaṅgavacana* と *adoṣodbhāvana* のみが正しい敗北の条件である」という VN の中核的規定が成立しなくなるであろう。従って、ダルマキールティは VN 後半部において、ニヤーヤ学派の規定する敗北の条件のうちで誤っているものと正しいものとを区分し、誤っているものに関してはまさしく誤っていると断ぜられるための十分な説得的根拠を説示し、かつ、正しいものについてはそれらを *asādhanaṅgavacana* と *adoṣodbhāvana* のいずれかに相当するものとしてのみ、その正しさを認める必要があったのである。このように、ニヤーヤ学派説の誤っている部分を自らの「敗北の条件」体系外へと斥け、同時にその正しい部分を自らの「敗北の条件」体系内へと解消させることで、ダルマキールティは自身の体系の十全性を保持したのだと考えられる。

以上の点を総合すれば、VN の包括的な論理構造は、次のように簡潔に纏めることができるであろう。

- **VN の包括的な論理構造**

VN は、*asādhanaṅgavacana* や *adoṣodbhāvana* という概念を頂点として系統的に統一された「敗北の条件」体系を構築した。その体系の真正性は、VN 前半部において敗北の条件に具体的内実を与えるために仏教論理学説を活用したことによって保証されており、また、体系の十全性は、VN 後半部においてニヤーヤ学派が規定する敗北の条件の細目を自説の内外に漏れなく解消させたことによって確証されている。

以上が第3章の帰結であり、「VN はいかなる意図で書かれた書であるのか」という問いに対する、本研究での最終回答である。

第4章の概要

VN に対する後代のニヤーヤ学派の論者達による応答の仕方を調べた先行研究は極めて乏しいが、しかし、VN の後代に対する影響を探る研究は、敗北の条件を基点とするインド討論思想史の展開を明らかにするという重大な意義を有している。従って第2部第4章では、これまでに得られたVN の内容に関する分析結果を踏まえた上で、後代の論師達に対するVN の影響力の射程を測ることにする。具体的には、後代の諸論書のうち、本章では *Nyāyamañjarī* (NM), *Nyāyavārttikatātparyāṭikā* (NVTṬ), *Nyāyabhūṣana* (NBhū) という三つのニヤーヤ学派のテキストを取り上げる。

まず、ダルマキールティがVN で示した敗北の条件の定義と、ニヤーヤ学派による二十二種類の敗北の条件の定義に対する批判を、ジャヤンタ・バッタ (Jayanta Bhaṭṭa) がNM においてどのように受容し、また再批判したかという問題を検討する。この点について、ジャヤンタは、*asādhanaṅgavacana* と *adoṣodbhāvana* というダルマキールティによる新規概念を *apratipatti* と *vipratipatti* というニヤーヤ学派の概念に還元し、かつ、ニヤーヤ学派の敗北の条件に対してダルマキールティが正しいと認める見解を歓迎する形で自説に逆輸入したのだ、と評することができる。ジャヤンタはこのようにダルマキールティの見解をうまく取り入れながらも、ダルマキールティの主張がニヤーヤ学派の説に比して何ら新しいところはないと解釈することにより、ニヤーヤ学派の学

説の VN に対する優位性を説いていることが解析された。

次に、『方便心論』(UH, T に収録), NS, NBh, NV における討論思想を経て, ダルマキールティが VN で示した「善人の討論」(satām vādaḥ) という新しいアイデアを, ヴァーチャスパティ・ミシュラ (Vācaspati Mīśra) が NVTṬ において, また, バーサルヴァジュニヤ (Bhāsarvajña) が NBhū において, いかにか受容したのかという問題を検討する. この点についての検討結果は, 以下のように纏めることができる.

- 「討論」概念の変遷史

1. UH は, 造論の目的を説明するに当たって, 「荆棘 (茨)」の比喻を用いた.
2. NS は UH からこの「茨」という比喩的表現を借用して, 論諍 (jalpa) と論詰 (vitaṇḍā) を定義した.
3. NBh は, NS を注釈して, 論諍と論詰の目的を勝利であると規定した.
4. VN は, 論諍と論詰の目的とされている「勝利」の概念を批判し, 代わりに, 「他者への裨益」(parānugraha) を討論の目的として提示した.
5. 少なくとも NBhū は, ダルマキールティの思想を受容して, 論諍・論詰における「勝利」の概念を否定し, 「他者への裨益」の概念を採用したことが伺える. NVTṬ については疑問の余地はあるが, NBhū と同様にダルマキールティの批判を受容している可能性を見て取ることができる.

以上のように, ダルマキールティは *Vādanyāya* という書において, 「敗北の条件」や「討論」といった諸概念を独創的な観点から再定義してみせた. 仏教認識論・論理学の大成者とも評価される彼の営為は, 討論思想の構築においても遺憾無く発揮されており, その点で *Vādanyāya* がインド討論思想史における極めて重要なターニングポイントを築いたと言ったとしても, 決して過大な評価ではないであろう.